

當世女装一班

泉鏡花

明治二十八年十月

こゝに先づ一個の裸美人ありと假定せよ、一代女に記したる、  
(年紀は十五より十八まで、當世顔は少し丸く、色は薄花櫻にし  
て面道具の四つ不足なく揃ひて、目は細きを好まず、眉濃く、鼻  
の間せはしからず次第高に、口小さく、齒並あら／＼として暗く、  
耳長みあつて縁淺く、身を離れて根まで見透き、額はわざとなら  
ず自然の生えどまり、首筋立伸びて後れなしの後髪、手の指はた  
よやく長みあつて爪薄く、足は八丈三分に定め、親指反つて裏す  
きて、胴間常の人より長く、腰しまりて肉置遅ましからず、尻付  
豊かに、物腰衣裳つきよく姿に位備はり、心立おとなしく女に定  
まりし藝優れて、萬に味からず、身に黒子一も無き)・・・曲  
線に依りて成りたちたる一個の物體ありとして、試みに渠が盛装  
して吾人に見ゆるまでの順序を思へ、彼女は先づ正に沐浴して、  
其天然の麗質玉の如きを磨くにも左の物品を要するなり、曰、  
手拭、垢擦、炭(ほうの木)、輕石、糠、石鹼、糸瓜。

これを七ツ道具として別に鶯の糞と烏瓜とこれを糠袋に和して  
用う、然る後、化粧すべし。

白粉、紅

の二品あり、別に白粉下といふものあり。さて頭髮には種類多

し、一々枚擧に違あらず、今本式に用ゐるものを

島田、丸鬘

の二種として、これを結ぶに必要なるは、先づ鬘形と髻となり。髻にたばみの小枕あり。鬘みの、横みの、懸みの、根かもじ、横毛といふあり、ばら毛といふあり。形に御殿形、お初形、歌舞伎形、などありと知るべし。次には櫛なり、差櫛、梳櫛、洗櫛、中櫛、鬘搔、毛筋棒、いづれも其くべからず。また、鬘附と梳油と水油とこの三種の油必要なり。他に根懸と手絡あり。元結あり、白元結、黒元結、奴元結、金柑元結、色元結、金元結、文、など皆其類なり。笄、簪は謂ふも更なり、向指、針打、鬘挾、髻挾、當節また前髪留といふもの出来たり。

恣て島田なり、丸鬘なり、よきに從ひて出来あがれば起ちて、まづ、湯具を絡ふ、これを二布といひ腰布といひ女の言葉に湯もじといふ、但し湯巻と混ぜべからず、湯巻は別に其ものあるなり。それより肌襦袢、その上に襦袢を着るもの、胴より上が襦袢にて腰から下が蹴出しになる、上下合はせて長襦袢なり。これに半襟の飾りを着く、さて其上に下着を着て胴着を着て、合着を着一番上が謂はずとも知れ切つて居る上着なり。帯の下に下と、なほ腰帯といふものあり。また帯上は帯留とおまけに扱きといふものあり。細腰が纏ふもの數ふれば帯をはじめとして、下紐に至るまで凡そ七條とは驚くべく、これでも解けるから妙なものなり。

さて先づ帯を、め果つれば、足袋を穿下駄を穿く。待て駒下駄

を穿かぬ先に忘れたる物多くあり、即ち、紙入、手拭、銀貨入、  
手提の革靴、扇となり。まだ、時計と指環もある。なくてはな  
らざる匂袋、これを忘れてなるものか。頭巾を冠つて肩掛を懸け  
る、雨の降る日は道行合羽、蛇の目の傘をさすなるべし。これに  
て禮服用の立派な婦人一人前、装飾品なり、衣服なり、はた穿  
物なり、携帶品なり、金を懸くれば際限あらず、以上に列記した  
るものを、はじめをはり取揃へむか、いくら安く積つて見て  
も・・・やつぱり少し安からず、男子は裸百貫にて、女は着た  
處が、千両々々。

羽織、半纏、或は前垂、被布などといふの、此外になほ多  
れどいづれも本式のものにあらず、別に項を分ちて以て禮服と  
もに詳記すべし。

肌着

最も膚に親しき衣なり、數百金の盛装をなす者も多くは肌着に  
綿布を用ふ、別に袖もなし、裏はもとよりなり、要するにこれ一  
片の汗取に過ぎず。

半襦袢

肌着の上に着す、地の色、衣の類、好によりていろ／＼あらむ。  
袖は友染か、縮緬か、いづれ胴とは異なるを用う、裏なき衣なり。

長襦袢

半襦袢の上に着く、いはゆる蹴出しの全身なり。衣服の内、これを最も派手なるものとす、緋縮緬、友染等、やゝふけたる婦人にてもなほ密にこの花やかなるを着けて思出とするなり。蓮歩を移す裾捌にはら／＼とこぼるゝ風情、蓋し散る花のながめに過ぎたり。紅裙三尺魂を裏むいくばくぞや。

蹴出

これ當世の腰巻なり。肌に蹴出を着ることなるが、人には見えぬ處にて、然も端物の高價なるを要するより經濟上、襦袢を略して半襦袢とし、腰より下に、蹴出を纏ひて、これを長襦袢の如く見せ懸けの略服なりとす、表は友染染、緋縮緬などを用ゐ裏には紅絹甲斐絹等を合す、すなはち一枚にて、幾種の半襦袢と組合はすことを得、なほ且長襦袢の如く白き脛にて蹴出すを得るなり、半襦袢と組合はすために紐を着けたり、もし紐を着けざるには、ずり落ざるために強き切を其引纏ふ部分に繼ぐ。

半襟

襦袢の襟に別にまたこれを着く、三枚襲の外部にあらはるゝ服装にして、謂はば一種の襟飾なり。最も色合と模様は人々の好に因る、金糸にて縫ひたるあり、縮緬、綾子、紹、等を用ふ。別に

不斷着物及び半纏に着くるもの、おなじく半襟と謂ふ。これには黒縹子、毛縹子、唐縹子、和縹子、織姫、南京黒八丈、天鵝絨など種々あり。

下着

三枚襲の時は衣地何にても三枚皆整ふべきを用ふ。たゞの下着は、八丈、糸織、更紗縮緬お召等、人々の好みに因る、裏は本緋、新緋等なり。

合着

これも下着と大差なし、但し下着も一體に上着より稍派手なるを用ゐるなり。

上着

衣の地は殆ど枚擧に違あらず。四季をり、年齢、身分などにより人々の好あらむ、編者は敢て關せざるなり。

比翼

一體三枚裏には上着も合着もはた下着も皆別々にすべきなれども、細身、柳腰の人、形態の風にも堪へざらむ、さまでに襲着してころ／＼見悪からむを恐れ、裾と袖口と襟とのみ二枚重ねて、胸はたゞ一枚になし、以て三枚裏に合せ、下との兼用に充つるなり、これを比翼といふ。甚だ外形をてらふ處の卑怯なる手段の如くなれども比翼といへばそれにて通り、我もやましからず、人も許すなり。

### 腰帶

衣服を、はおれる後、裾の長きを引上げて一幅の縮緬にて腰を緊め、然る後に衣紋を直し、胸襟を整ふ、この時用ゐるを腰帶といふ、勿論外形にあらはれざる處、色は紅白、人の好に因る、價の低きはめりんすもあり。

### 下緊

腰帶を占てふくらみたる胸の衣を下に推下げたる後、乳の下に結ぶもの下緊なり、品類は大抵同じ、これも外には見えざるなり近頃花柳の艶姐、經濟上、彼の腰帶とこの下緊とを略して一筋にて兼用ふ、すなはち腰を結びたる切の餘を直ちに引上げて帯の下緊にしたるなり。其腰と帯との間にととき色縮緬など下緊のちらりと見ゆる處、頗る意氣なりと謂ふものあり。

帯

一寸の蟲にも五分の魂、其の幅八寸五分にして長八尺ばかりなるもの、これ蓋し女の魂なり。さても魂の大ききよ。蜿蜒として衣桁に懸る處、恰も異體にして奇紋ある一條の長蛇の如く、縹、西陣、綾、緞、綾織、綾織、綾織、純子、琥珀、蝦夷錦、唐縹子、和縹子、南京縹子、織姫縹子あり毛縹子あり。婦人固くこれを胸間に纏うて然も解難しとせず、一體品質厚くして幅の廣さが故に到底絲を結ぶが如く、しつかりとするものにあらねば、このずり落ざることが爲に、

帯揚

を用ふ、其背に於て帯をおさふる處に棉を入れ、守護を入れなです。縮緬類をくけたるなり。また唯しごきたるものありといふ引廻して前にて結び、これを帯に推込みて仄かに其一端をあらはす、衣と帯とに照應する色合の可なるものまた一段、美の趣きあるなり。

帯留

帯揚を結びて帯をしめたる後、帯の結めの下に通して引廻し、前にて帯の幅の中ばに留む、これも紐にて結ぶあり、パチンにて留むるあり。この金具のみにても、貴重なるものは百金を要す、

平打なるあり、丸打なるあり、ゴム入あり、菖浦織あり、くはし  
くは流行の部に就いて見るべし。

### 扱帯

帯留の上になほ一條の縮緬を結ぶ。ぐるりとまはしてゆるく脇  
にて結ぶもの、これを扱帯といふなり。多くは桃割、唐人髷時代  
に用ふ。島田、丸髷は大抵帯留のみにて済ますなり、色は人々の  
好に因る。

### 浴衣

浴衣は湯雑巾の略稱のみ。湯あみしてあがりたる後に纏ふゆゑ  
にしか名づく。今木綿の單衣をゆかたといふも、つりま湯上りの  
衣といふことなり。

### 湯巻

奉仕御湯殿之人所着衣也白絹也と侍中群要に見えたりとか。貞  
丈雑記に、湯を召さするに常の衣の上に白き生絹を、湯巻ともい  
まきともいふなり。こは湯の滴の飛びて衣を濡すを防ぐべきため  
の衣なり、とあり。俗に婦人の腰に纏ふ處の



湯具

といふものを湯巻といふは違へりとぞ。今の湯具は古の下裳に代用したる下部を蔽ふの衣なり。嬉遊笑覽に、湯具といふは、男女ともに前陰を顯して湯に入ることはもとなき事にて必ず下帯をかきかへて湯へ入るゆゑ湯具といふ。古の女は、下賤なるも袴着たれば、下裳さへなく唯肌着を紐にて結びたり。これこそ下帯といふなりけれ。伊勢物語に「二人して結びし紐を一人して相見までは解かじとぞ思ふ。」思ふに下裳は小兒の附紐の如く肌着に着けたる紐なるべし。或は今下じめといふものの如く結びたるものならむか。應永に書きたる日高川の繪巻物には、女、裸にて今の湯具めくものを着けて河に入らんとする處寫せり、恐らくこれ下裳なるべし、とおなじ書に見ゆ。湯具に紐つけることはむかしは色里になかりしとぞ。西鶴が胸算用に「湯具も木紅の二枚かさね」と云々あはせて作りたるものありしと見えたり。ともかくも湯具と湯巻は全然別物なりと知るべし。紫式部日記に、ゆまきすがた、豈腰にまとふに布のみを以てしたる裸美人ならむや。

襦袢

源氏枕草子等に、かざみといへるもの字に汗衫と書くは即ちいまの襦袢なり。汗取の帷子とおなじき種類にして直ちに肌に着る衣なり。今人々の用うるは半衣にして袖口を着く、婦人はまた長襦袢あり。

犢鼻褌

木綿の布六尺、纏うて腰部を蔽ふもの、これを犢鼻褌と謂ふ。  
越中、もつこう等はまた少しく異なれり。長崎日光の邊にて、は  
こべといひ、奥州にてへこしといふも、こはたゞ名稱の異なるの  
み。また、たふさぎといふよしは、手にて前を塞ぎ秘すべきを、  
手のかはりに布にておほふゆゑにいふなりとぞ。(何うでも  
いゝ。)

【完】